

夢遊病者の死

江戸川乱歩



彦太郎が勤め先の木綿問屋をしくじつて、父親の所へ帰つて来てからもう三ヶ月にもなつた。旧藩主M伯爵邸の小使みたいなことを勤めてかつかつ其日を送っている、五十を越した父親の厄介になつてゐるのは、彼にしても決して快いことではなかつた。どうかして勤め口を見つけ様と、人にも頼み自分でも奔走しているのだけれど、折柄の不景気で、学歴もなく、手にこれという職があるでもない彼の様な男を、備つて呉れる店はなかつた。尤も住み込みなればという口が一軒、あるにはあつたのだけれど、それは彼の方から断つた。というのは、彼にはどうしても再び住み込みの勤めが出来ない訳があつたからである。

彦太郎には、幼い時分から寝惚ける癖があつた。ハッキリした声で寝言を云つて、側にいるものが寝言と知らずに返事をする、それを受けて又喋る。そうしていつまでも問答を繰返すのだが、さて、朝になつて目が覚めて見ると少しもそれを記憶していないのだ。余りいうことがハッキリしているので、気味が悪い様だと、近所の評判になつていた位

である。それが、小学校を出て奉公をする様になつた当時は、一時止んでいただけけれど、どうしたものが二十歳を越してから又再発して、困つたことは、見る見る病勢が募つて行くのであつた。

夜半にムクムクと起上つて、その辺を歩き廻る。そんなことはまだお手軽な方だつた。ひどい時には、夢中で表の締りを——それが住み込みで勤めていた木綿問屋のである——その締りを開けて、一町内をぐるつと廻つて来て、又戸締りをして寝て了つたことさえあるのだ。

だが、そんな風のこと丈けなら、気味の悪い奴だ位で済みもしようけれど、最後には、その夢中でさ迷い歩いている間に、他人の品物を持つて来る様なことが起つた。つまり知らず知らずの泥坊なのである。しかも、それが二度三度と繰返されたものだから、いくら夢中の仕草だといえ、泥坊を備つて置く訳には行かぬというので、もうあと三年で、年期を勤め上げ、暖簾を分けて貰えようという惜しい所で、とうとうその木綿問屋をお払箱になつて了つたのである。

最初、自分が夢遊病者だと分つた時、彼はどれ程驚いたことであろう。乏しい小遣錢をはたいて、医者にもみて貰つた。色々の医学の書物を買込んで、

自己療法もやつて見た。或は神仏を念じて、大好物の餅を断つて病氣平癒の祈願をさえた。だが、彼のいまわしい悪癖はどうしても治らぬ。いや治らぬどころではない、日にまし重くなつて行くのだ。そして、遂には、あの思出してもゾツとする夢中の犯罪、ああ、俺は何という因果な男だろう。彼はただもう、身の不幸を歎く外はないのである。

今までの所では幸に、法律上の罪人となることだけは免れて来た。だが、この先どんなことで、もつとひどい罪を犯すまいものでもない。いや、ひよつとしたら、夢中で人を殺す様なことさえ、起らないとは限らぬのだ。

本を見ても、人に聞いても、夢遊病者の殺人といふのは間々ある事らしい。まだ木綿問屋にいた頃、飯炊きの爺さんが、若い時分在所にあつた事実談だといつて、気味の悪い話をしたのを、彼はよく覚えてゐる。それは、村でも評判の貞女だつたある女

が、寢惚けて、野らで使う草刈鎌をふるつてその亭主を殺して了つたといふのである。

それを考えると、彼はもう夜というものが怖くて仕様がななのだ。そして、普通の人には一日の疲れを休める安息の床が、彼丈には、まるで地獄の様に思われるのだ。尤も家へ歸つてからは、一寸発作がやんでゐる様だけれど、そんなことで決して安心は出来ないのだ。そこで、彼は、住み込みの勤めなど、どうしてどうして二度とやる氣はしないのである。

ところが、彼の父親に見ると、折角勤め口が見つかつたのを、何の理由もなく断つて了う彼のやり方を、甚だ心得難く思うのである。といふのは、父親はまだ、大きくなつてから再発した彼の病氣について、何も知らないからで、息子がどういふ過失で木綿問屋をやめさせられたか、それさえ実はハッキリしない位なのだ。

ある日、一台の車がM伯爵の門長屋へ這入つて来て、三畳と四畳半二間切りの狭苦しい父親の住居の前に梶棒を卸した。その車の上から息子の彦太郎が

妙にニヤニヤ笑いながら行李こくりを下げて降りて来たのである。父親は驚いて、どうしたのだと聞くと、彼はただフンと鼻の先で笑って見せて、少し面目めんぼくないことがあつたものだからと答えたばかりだつた。

其翌日その、木綿問屋の主人から一片の書状が届いて、そこには、今度都合により一時御子息を引取つて貰うことにした。が、決して御子息に落度があつた訳ではないからという様な、こうした場合の極きまり切つた文句が記しるされていた。

そこで、父親は、これはつつきり、彼が茶屋酒ちややせけでも飲み覚えて、店の金を使い込みでもしたのでらうと早合点はやがってんをしてつたのである。そして、暇さえあれば彼を前に坐らせて、この柔弱者奴にやうじやくものめがという様な、昔気質むかしかたぎな調子で意見を加えるのだつた。

彦太郎が、最初帰つて来た時に、実はこうこうだと云つて了えば訳もなく済んだのであらうが、それを云いそびれて了つた所へ、父親に変な誤解をされてお談義まで聞かされては、彼の癖として、もうどんなことがあつても眞実を打開うちあける気がしないのであつた。

彼の母親は三年あとになくなり、他に兄弟とてもない、ほんとうに親一人子一人の間柄あいだがらであつたが、そういう間柄であればある程、あの妙な肉親憎悪にくいでもいう様な感情の為に、お互たがいに何となく隔意かくいを感じ合つていた。彼が依怙いこじ地に病氣びやうきのことを隠していたのも、一つはこういう感情かんじに妨さまたげられたからであつた。尤も一方では、二十三歳の彼には、それを打開けるのが此上このうえもなく気恥きぢしかったからでもあるけれど。そこへ持つて来て、彼が折角の勤め口を断つて了つたものだから、父親の方では益々ますます立腹たてはらする。それが彦太郎にも反映して、彼の方でも妙にいらいらして来る。という訳で、近頃ではお互に口を利けば、すぐにもう喧嘩腰けんかこしになり、そうでなければ、何時間でも黙つて睨にらみ合つているという有様であつた。今日も亦またそれである。

二三日雨が降り続いたので、彦太郎は、日課の様にしていた散歩にも出られず、近所の貸本屋から借りて来た講談本も読み尽して了い、どうにも身の置き所もない様な気持になつて、ボンヤリと父親の小さな机の前に坐つていた。

四畳半と三畳の狭い家が、畳から壁から天井から、どこからどこまでジメジメと湿つて、すぐに父親を聯想する様な一種の臭気がむつと鼻を突く。それに、八月のさ中のことで、雨が降つてはいても耐らなく蒸し暑いのである。

「エツ、死んじまえ、死んじまえ、死んじまえ……」

彼はそこにあつた、鉛の屑を叩き固めた様な重い不恰好な文鎮で、机の上を滅多無性に叩きつけながら、やけくその様にそんなことを怒鳴つたりした。そうかと思うと又、長い間黙りこくつて考え込んでいることもあつた。そんな時、彼はきつと十萬円の夢を見ているのである。

「あああ、十萬円ほしいな。そうすれば働かなくつてもいいのだ。利子で十分生活が出来るのだ、俺の病氣だつて、いい医者にかかつて、金をうんとかけたら、治らないものでもないのだ。親父にしてもそうだ。あの年になつて、みじめな労働をすることは出来ないのだ。それもこれも、みんな金だ、金だ。十萬円ありさえすればいいのだ。こうつと、十萬円だから、銀行の利子が六分として、年に六千円、月

に五百円か、すてきだな……」

すると彼の頭に、いつか木綿問屋の番頭さんに連れられて行つたお茶屋の光景が浮ぶのである。そして、その時彼の側に坐つた眉の濃い一人の芸妓の姿や、その声音や、いろいろの艶しい仕草が、浮ぶのである。

「ところで、何んだっけ。ああそうそう十萬円だな。だが一体全体そんな金がどこにあるのだ。エツくそ、死んじまえ、死んじまえ、死んじまえ……」
そして、としてもゴツンゴツンと、文鎮で机の上を殴るのである。

彼がそんなことを繰返している所へ、いつの間にか電燈がついて、父親が帰つて来た。

「今帰つたよ。やれやれよく降ることだ」

近頃では、その声を聞くと彼はゾーツと寒気を感じるのだ。

父親は雨で汚れた靴の始末をしてうと、やれやれという恰好で四畳半の貧弱な長火鉢の前に坐つて、濡れた紺の詰襟の上衣を脱いで、クレップシャツ一枚になり、ズボンのポケットから取出した、真鍮

のなため煙管で、まず一服するのであった。

「彦太郎、何か煮て置いたかい」

彼は父親から炊事係を命ぜられていたのだけれど、殆どそれを実行しないのだった。朝などでも、父親がブツブツ云いながら、自分で釜の下を焚きつける日が多かった。今日とても、無論何の用意もしていないのである。

「オイ、なぜ黙つとるんだ。オヤオヤ湯も沸いていないじゃないか。身体を拭くことも出来やしない」
何といつて見ても、彦太郎が黙つていて答えないので、父親は仕方なく、よつこらしよと立上つて、勝手許へ下りて、ゴソゴソと夕餉の支度にとりかかるのであった。

その気配を感じながら、じつと机の前の壁を見つめている彦太郎の胸の中は、憎しみとも悲しみとも、何とも形容の出来ない感情の為に、煮え返るのである。天気の良い日なれば、こういう時には、何も云わずにプイと外へ出て、その辺を足にまかせて歩き廻るのだけれど、今日はそれも出来ないのので、いつまでもいつまでも、雨もりで汚れた壁と睨めつ

くらをしている外はない。

やがて、鮭の焼いたので貧しい膳立てをした父親が、それ丈けが楽しみの晩酌にと取りかかるのである。そして、一本の徳利を半分もあけた頃になると、ポツポツと元気が出て、さて、お極りのお談義が始まるのだ。

「彦太郎、一寸ここへお出で、……どういふ訳で、お前は俺のいうことに返事が出来ないのだ。ここへ来いといつたら来るがいいじゃないか」

そこで、彼は仕方なく机の前に坐つたまま、向き丈けを換えて、始めて父親の方を見るのだが、そこには、頭の禿と、顔の皺とを除くと、彼自身とそっくりの顔が、酒の為に赤くなって、ドロンとした目を見はつていたのである。

「お前は毎日そうしてゴロゴロしていて、一体恥しくないのか……」と、それから長々とよその息子の例話などがあつて、さて「俺はな、お前に養つて呉れとは云わない。ただ、この老耄の脛嚙りをして、ゴロゴロしていることだけは、頼むから止めてくれ、どうだ分つたか。分つたのか分らないのか」

「分つてますよ」すると彦太郎がひどい剣幕で答えるのだ。「だから、一生懸命就職口を探しているのです。探してもなければ仕方がないじゃありませんか」

「ないことはあるまい。此間××さんが話して下さった口を、お前はなぜ断つて了つたのだい。俺はどうもお前のやることはさっぱり分らない」

「あれは住み込みだから、厭だと云つたじゃありませんか」

「住み込みが何故いけないのだ。通勤だつて住み込みだつて、別に変りはない筈だ」

「……………」

「そんな贅沢がいえた義理だと思ふか。先のお店をしくじつたのは何が為だ。みんなその我儘からどうぞ。お前は自分ではなかなか一人前の積りかも知れないが、どうして、まだまだ何も分りやしないのだ。人様が勧めて下さる所へハイハイと云つて行けばいいのだ」

「そんなことを云つたつて、もう断つて了つたものを、今更ら仕様がないうちやありませんか」

「だから、だからお前は生意気だと云うのだ、一体あれを、俺に一言の相談もしないで、断つたのは誰だ。自分で断つて置いて、今更ら仕様がなうとは、何ということだ」

「じゃあ、どうすればいいのです。……そんなに僕がお邪魔になるのだつたら、出て行けばいいのでしょう。エエ、明日からでも出て行きますよ」

「バ、馬鹿ツ。それが親に対する言草か」

やにわに父親の手が前の徳利にかかると、彦太郎の眉間めがけて飛んで来る。

「何をするのです」

そう叫ぶが早いか、今度は彼の方から父親に武者ぶりついで行く。狂気の沙汰である。そこで世にもあさましい親と子のとつ組合いが始まるのだ。だが、これは何も今夜に限つたことではない。もう此頃では毎晩の様に繰返される日課の一つなのである。

そうして、とつ組合っている内に、いつも彦太郎の方が耐りかねた様に、ワツとばかりに泣き出す。……何が悲しいのだ。何ということもなく凡て

が悲しいのだ。詰襟の洋服を着て働いている五十歳の父親も、その父親の家でゴロゴロしている自分自身も、三畳と四畳半の乞食小屋の様な家も、何もかも悲しいのだ。……………

そして、それからどんなことがあつたか。

父親が火鉢の抽斗から湯札を出して、銭湯へ出掛けた様子だつた。暫くたつて帰つて来ると、彼の御機嫌をとる様に、

「すつかり晴れたよ。オイ、もう寝たのか、いい月だ、庭へ出て見ないか」

などといつていた。そして自分は縁側から庭へ下りて行つた。その間中、彦太郎は四畳半の壁の側へ俯伏して、泣き出した時のままの姿勢で、身動きもしないでいた。蚊帳もつらないで全身を蚊の食うに任せ、ふてくされた女房の様に、棄鉢に、口癖の「死んじまえ。死んじまえ」を念仏みたいに頭の中で繰返していた。そして、何時の間にか寝入つて了つたのである。

それからどんなことがあつたか。

その翌朝、開けはなした縁側からさし込む、まば

ゆい日光の為に、早くから目を覚めた彦太郎は、部屋の中がいやにガランとして、昨夜のまま蚊帳も吊つてなければ床も敷いてないのを発見した。

さてはもう父親は出勤したのかと、柱時計を見ると、まだやつと六時を廻つたばかりだ。何となく変な感じである。そこで、睡い目をこすりながら、ふと庭の方を見ると、これはどうしたというのである。父親がその籐椅子に凭れ込んで、ぐつたりとしているではないか。

まさか睡っているのではあるまい。彦太郎は妙に胸騒ぎを覚えながら、縁側にあつた下駄をつつかけると、急いで籐椅子の側へ行つて見た。——読者諸君、人間の不幸なんてどんな所にあるか分らないものだ。その時縁側には、二足の下駄があつて、彼の穿いたのはその内の朴齒の日和下駄であつたが、若しそうでなく、もう一つの桐の地下穿きの方を穿いていたなら、或はあんなことにならなくて済んだのかも知れないのだ。——

近づいて見ると、彦太郎の仰天したことは、父親はそこで死んでいたのである。両手を籐椅子の肘か

けからダラリと垂らして、腰の所で二つに折れでもした様に身体を曲げて、頭と膝とが殆どくつつ着かんばかりである。それ故、見まいとしても見えるのだが、その後頭部がひどい傷になつてゐる、出血こそしていないけれど、いうまでもなくそれが致命傷に相違ない。

まるで作りつけの人形ででもある様に、じつとしている父親の奇妙な姿を、夏の朝の輝かしい日光が、はれがましく照していた。一匹の虻が鈍い羽音を立てて、死人の頭の上を飛び廻つていた。

彦太郎は、余り突然のことなので、悪夢でも見てゐるのではないかと、暫くはぼんやりそこに佇んでいたが、でも、夢であろう筈もないので、そこで、彼は庭つづぎの伯爵邸の玄関へ駈けつけて、折から居合せた一人の書生に事の次第を告げたのである。伯爵家からの電話によつて間もなく警察官の一行がやつて来たが、中に警察医も混つていて、先ず取あえず死体の検診が行われた。その結果、彦太郎の父親は「鈍器による打撃の為に脳震盪」を起したもので、絶命したのは昨夜十時前後らしいということ

が分つた。一方彦太郎は警察署長の前に呼び出されて、色々取調べを受けた。伯爵家の執事も同様に訊問された。併し両人とも何等警察の参考になる様な事柄は知つていなかったのである。

それから現場の取調べが開始された。署長の外に背広姿の二人の刑事が、色々議論を戦わせながら、併し如何にも専門家らしくテキパキと調査を進めて行つた。彦太郎は伯爵家の召使達と一緒にぼんやりとその有様を眺めていた。彼は余りのことに思考力を失つて了つて、その時まで、まだ何事も氣附かないでいたのだ。一種の名状しがたい不安に襲われてはいたけれど、併しそれが何故の不安であるか、彼は少しも知らなかつたのである。

そこは庭とは云つても、彦太郎の家の裏木戸の外にある方四五間の殺風景な空地なので、彦太郎の家と向い合つて伯爵家の三階建ての西洋館があり、右手の方は高いコンクリート塀を隔てて往来に面し、左手は伯爵家の玄関に通ずる広い道になつてゐる。その殆ど中央に主家の使いふるしの毀れかかつた籐椅子が置いてあるのだ。

無論他殺の見込みで取調べが進められた。併し、死体の周囲からは加害者の遺留品らしいものは何も発見されなかった。空地が隅から隅まで搜索せられたけれど、西洋館に沿って植えられた五六本の杉の木を除いては、植木一本、植木鉢一つないガランとした砂地で、石ころ、棒切れ、其他兇器その他に使われ得る様な品物は勿論もちろん、疑うべき何物をも見出すことは出来なかった。

たった一つ、籐椅子から一間ばかりの所にある杉の木の根許ねもとの草の間に、一束のダリヤの花が落ちていた外ほかには、だが、誰もそんな草花などには気がつかなかった。或は、仮令たとひ気がついていても特別の注意を払わなかった。彼等はずもつと外のもの、例えば一筋の手拭てぬぐいとか、一個の財布とか、所謂遺留品いわゆるらしいものを探していたのである。

結局唯一の手掛りは足跡だった。幸なことには降りつづいた雨の為に、地面が滑かになつていて、前夜雨が上つてからの足跡だけがハッキリと残つていのだ。とは云え今朝からもう沢山たくさんの人が歩いてるので、それを一々検しらべ上げるのは随分骨ずいぶんの折れる

仕事ではあつたが、これは誰の足跡、あれは誰の足跡と丹念にあてはめて行くと、案あんの定じよう、あとに一つ丈け主のない足跡が残つたのである。

それは幅の広い地下穿きらしいもので、その辺をやたらに歩き廻つたと見えて、縦横無尽じゆうおうむじんの跡がついている。そこで、刑事の一人がそれを追つて行つて見ると、不思議なことには、足跡は彦太郎の家の縁側から発して、又そこへ帰つてゐることが分つた。そして、縁側の型ばかりの沓脱石くつぬぎしの上に、その足跡にピッタリ一致する古い桐の地下穿きがチャンと脱いであつたのである。

最初刑事が足跡を検べ始めた頃に、彦太郎はもうその桐の古下駄に気がついていた。彼は父親の死体を発見してから一度も家の中へ這入つたことはないのだから、その足跡は昨夜ついたものに相違ないが、とすると、一体何人なんびとがその下駄を穿いたのであろうか。……

そこで、彼はやつとある事を思当つたのである。彼はハツと昏倒こんたうし相まうになるのをやつと耐こらえることが出来た。頭の中でドロドロした液体が渦巻の様に回

転し始めた。レンズの焦点が狂った様に、周囲の景色がスーツと目の前からぼやけて行つた。そして、そのあとへ、あの机の上の重い文鎮をふり上げて、父親の脳天を叩きつけようとしている、自分自身の恐ろしい姿が幻の様に浮んで来た。

「逃げろ、逃げろ、さあ早く逃げるんだ」

何者とも知れず、彼の耳の側で慌しく叫び続けた。

彼は一生懸命で何気ない風を装いながら、伯爵家の召使達の群から少しづつ少しずつ離れて行つた。それが彼にとつてどれ程の努力であつたか。今にも「待てッ」と呼び止められ相な気がして、もう生きた心地もないのである。

だが、仕合せなことには、誰もこの彼の不思議な挙動に気付くものもなく、無事に家の蔭まで辿りつくことが出来た。そこから彼は一息に門の所へ駆けつけた。見ると門前に一台の警察用の自転車を立てかけてある。彼はいきなりそれに飛び乗って、行手も定めず、無我夢中でペダルを踏んだ。

両側の家並がスーツスーツと背後へ飛んで行つ

た。幾度となく往來の人に突きあたつて顛覆し相になつた。それを危く避けては走つた。今何という町を走っているのか無論そんなことは知らなかつた。賑かな電車道などへ出そうになると、それをよけて淋しい方へ淋しい方へとハンドルを向けた。

それからどれ程炎天の下を走り続けたことか、彦太郎の気持では十分十里以上も逃げのびたつもりだけれど、東京の町はなかなか尽きなかつた。ひよつとすると、彼は同じ所をグルグル廻つていたのかも知れないのだ。そうしている内に、突然パンというひどい音がしたかと思うと、彼の自転車は役に立たなくなつて了つた。

彼は自転車を捨てて走り出した。白緋の着物が、汗の為に、水にでも漬けた様にビツシヨリ濡れていた。足は棒の様に無感覚になつて、一寸した障礙物にでも、つまずいては倒れた。

心臓が胸の中で狂気のように躍り廻つていた。咽喉はカラカラに渴いて、ヒューヒューと喘息病みみたいな音を立てた。彼はもう、何の為に走らねばならぬのか、最初の目的を忘れて了つていた。ただ目の

前に浮んで来る世にも恐しい親殺しの幻影が彼を走らせた。

そして、一町、二町、三町、彼は酔っぱらいの様な恰好で、倒れては起き上り、倒れては又起き上って走った。が、その痛ましい努力も長くは続かなかつた。やがて彼は倒れたまま動かなくなつた。汗と埃にまみれた彼の身体を、真夏の日光がジリジリと照りつけていた。

暫くして、通行人の知らせて駆けつけた警官が、彼の肩を掴んで引起そうとした時に、彼は一寸ふり離して逃げ出す恰好をしたが、それが最後だつた。彼はそうして警官の腕に抱かれたまま息を引きとつたのである。

その間に、伯爵邸の父親の死骸の側では何事が起つていたか。

警官達が彦太郎の逃亡に気付いたのは、彼が半里も逃げ延びている時分であつた。署長は、もう追つかけても駄目だと悟ると、猶予なく伯爵家の電話を借りて、その旨を本署に伝え、彦太郎逮捕の手配を

命じた。そうして置いて、彼等は猶も現場の調査を続け、旁々検事の来着を待つことにしたのである。

無論彼等は彦太郎が下手人だと信じた。現場に残された唯一の手掛りである桐の下駄が、彦太郎の家の縁側から発見されたこと、その下駄の主と見做すべき彦太郎が逃亡したこと、この二つの動かし難い事実が彼の有罪を証拠立てていた。

ただ、彦太郎が何故に真実の父親を殺害したか、そして又、下手人である彼が、なぜ警官が出張するまで逃亡を躊躇していたかという二点が、疑問として残されていたけれど、それもいづれ彼を逮捕して見れば分ることなのである。ところが、そうして事件が一段落をつげたかと思えた時に、実に意外なことが起つた。

「その人を殺したのは、私です。私です」

伯爵邸の方から一人の真蒼な顔をした男が、署長の所へ走つて来て、いきなりこんなことを云い出したのである。その男はまるで熱病患者の様に、「私です私です」とそればかりを繰返すのだ。

署長を始め刑事達は、あつけにとられて、不思議

な闖入者の姿を眺めた。そんなことがあり得るだろうか。まさか、この男が彦太郎の家にあつた桐の下駄を穿いたとも思われぬ。そうだとすると、少しも足跡を残さないで、どうして殺人罪を犯すことが出来たのであろうか。そこで、彼等は兎も角、男の陳述を聞いて見ることにした。

それは実に意外な事実であつた。警察始まつて以来の記録といつても差支ない程、不思議千萬な事実であつた。さて、その男（それは伯爵家の書生の人であつた）の告白した所はこうなのである。

昨日、伯爵邸に数人の来客があつて、西洋館三階の大広間で晚餐が供せられた。それが終つて客の歸つたのが丁度九時頃であつた。彼はそのあと片付けを命ぜられて、部屋の中をあちこちしながら働いていたが、ふと絨氈の端につまずいて倒れた。そのはずみに部屋の隅に置いてあつた花瓶を置く為の高い台を倒し、台の上の品物が、開けはなしてあつた窓から飛び出したのである。

その品物が若し花瓶であつたら、こんな間違いは起らなかつたのであろうが、それは、花瓶の台には

のつていたけれど、花瓶ではなくて、五六時間もたれば跡方もなく融けてなくなつて了う水の塊だったのである。裝飾用の花氷だったのである。水を受ける為の装置は台に取りつけてあつたので、上の氷丈けが落ちたのだ。無論それは昼間からその部屋に飾つてあつたのだから、大部分解けて了つて、殆ど心丈けが残つていただけけれど、でも老人に脳震盪を起させるには十分だつたと見える。

彼は驚いて窓から下を覗いて見た。そして、月あかりでそこに小使の老人が死んでいるのを知つた時、どんなに仰天したか。仮令過ちからとはいえ俺は人殺しをやつて了つたのだ。そう思うともうじつとしていられない。皆に知らせようか、どうしようか、とつおいつ思案をしている中に時間が経つ、若しこのまま明日の朝まで知れずにいたら、どうなるだろう。ふと彼はそんなことを考えて見た。

いうまでもなく、氷は解けて了うのだ。中のダリヤの花丈けは残つているだろうけれど、ひよつとしたら、氣付かれずに済むかも知れない。それとも今から氷のかけらを拾いに行こうか。いやいや、そんな

なことをして若し見つかったら、それこそ罪人にされて了う。彼は床へ這入つても一晩中まんじりともしなかつた。

ところが朝になつて見ると、事件は意外な方向に進んで行つた。朋輩ほうはいから詳しい様子を聞いて、一時はこいつはうまく行つたと喜んだものの、流石さすがに善人の彼はそうしてじつとして居ることは出来なかつた、自分の代りに一人の男が恐しい罪名を着せられて居るかと思うと、余りに空恐しかつた。それに又、そうして一時は免れることが出来てもいざれ眞実が暴露する時が来るに相違なかつた。そこで彼は今は意を決して署長の所へやつて来た。という訳であつた。

これを聞いた人々は、余りに意外な、そして又余りにあつけない事実には、暫くはただ顔を見合せて居るばかりであつた。

それにしても彦太郎は早まつたことをしたものである。その時は彼が逃亡してからまだ三十分も経つていないのだつた。それとも又、彼が、いや彼でなくとも、刑事なり伯爵家の人達なりが、あの杉の根

許に落ちていた一束のダリヤの花にもつとよく注意したならば、そしてその意味を悟ることが出来たならば、彦太郎は決して死ななくとも済んだのである。

「併しおかしいねえ」暫くしてから警察署長が妙な顔をして云つた。「この足跡はどうしたというのだろう。それから、死人の息子はなぜ逃亡したのだろうか」

「分りましたよ、分りました」丁度この時間題の桐の下駄を穿き試みていた一人の刑事がそれに答えて叫んだ。「足跡はなんでもないので。この下駄を穿いて見ると分りますがね。割れているのですよ。見た所別状ない様ですけれど、穿いて見ると真中からひび割れていることが分るのです。もう一寸で離れて了い相です。誰だつてこんな下駄を穿いているのは氣持がよくありませんからな。きつと被害者が庭を歩いている内にそれに氣づいて穿き換えたのですよ」

若しこの刑事の想像が当たっているとすると、彼等は今まで被害者自身の足跡を見て騒いでいた訳であ

る。何という皮肉な間違いであろう。多分それは、殺人が行われたからには犯人の足跡がなければならぬという尤もな理窟が彼等を迷わしたのではあろうけれど。

その翌々日、M伯爵家の門を二つの棺かみが出た。い
うまでもなく、不幸なる夢遊病者彦太郎とその父親
を納めたものである。噂うわさを聞いた世間の人達は、だ
れもかれも、彼等親子の変死を気の毒がらぬものは
なかつた。だが、あの時彦太郎がなぜ逃亡を試みた
かと云う点だけは、永久に解くことの出来ない謎と
して残されていた。

底本：「江戸川乱歩全集 第1巻 屋根裏の散歩者」光文社文庫、光文社

2004（平成16）年7月20日初版1刷発行

2012（平成24）年8月15日7刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第一巻」平凡社

1931（昭和6）年6月

初出：「苦楽」プラトン社

1925（大正14）年7月

※初出時の表題は「夢遊病者彦太郎の死」です。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号-86）を、大振りにつくっています。

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

入力：門田裕志

校正：江村秀之

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。